

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク 29

＊ 動物の見る夢 ＊

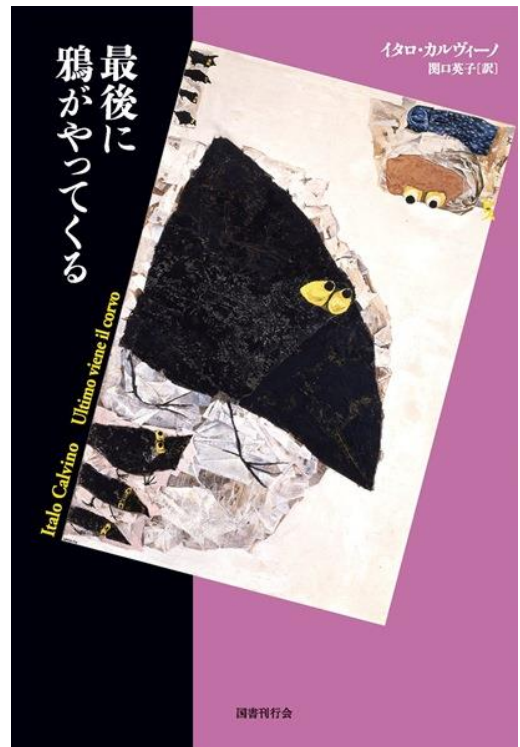
堤 康徳

例年より早い桜の開花を迎えた今年三月末、カルヴィーノの第一短篇集『鴉が最後にやってくる』(Ultimo viene il corvo, 1949)が国書刊行会より出版された。訳者は、関口英子さん。これまでに、ディーノ・ブツァーティ『神を見た犬』、プリーモ・レーヴィ『天使の蝶』、ルイジ・ピランデッロ『月を見つけたチャウラ』、アルベルト・モラヴィア『薔薇とハナムグリ』(いずれも光文社刊)など、多くのイタリア文学の傑作を翻訳されてきた。その質の高い精力的な訳業に、私はつねづね畏敬の念を抱いてきた。

『天使の蝶』と『薔薇とハナムグリ』の刊行のときと同じく、関口さんに依頼されて、『鴉が最後にやってくる』にも、解説として拙文を寄せることになった(「カルヴィーノの出発地—リヴィエラの風景とパルチザンの森」)。これは、本連載の原稿が土台になっている。カルヴィーノの珠玉の短篇とあわせてお読みいただければ、これ以上の幸いはない。

『鴉が最後にやってくる』を一読して、あらためてカルヴィーノの作家としての力量に驚かされる。のちの作品群を予見するような多彩な世界がすでに、この第一短篇集からは読み取れる、と言ってもよい。カルヴィーノは、この短篇集を主題ごとに三つに分類している。ひとつ目は、レジスタンス(あるいは戦争や暴力)の物語。ふたつ目が、終

戦直後のピカレスクな物語。三つめが、少年や動物の多く登場する、リヴィエラ(リグーリア海岸)の風景が顕著なもの。そして、これらの分類から漏れる、いわば政治的な寓話。いずれの短篇においても、カルヴィーノ本来のスピーディーでリズムカルな語り口と、科学的な観察眼に支えられた卓抜な描写が光る。



【『鴉が最後にやってくる』表紙】

前回(2018年2月号)、カルヴィーノ編纂の『イタリア民話集』に収録された、動物の言語にかんする二篇の昔話について書いた。話の枕として、かつてわが家で飼っていた猫の睡眠中の奇妙な行動を紹介した。熟睡していた猫が急に起き上がり、獲物を捕るような身振りを見せたのだった。それを見た私は以下のような仮説を立てた。猫も夢を見ているにちがいない、そして、夢を見るのは言語能力がそなわっているからではないか、と。ネット上で猫の睡眠について調べたところ、猫にも、レム睡眠とノンレム睡眠の区別があり、レム睡眠時に、たとえばヒゲをピクピク動かしているときなど、何らかの夢を見ている確率が高いようである。ただし、猫の見る夢と、猫のこぼとの関係はいまだに不明である。

『鴉が最後にやってくる』所収の「父から子へ」(*Di padre in figlio*)と題された短篇にも、動物の見る夢の記述がある。この短篇の初出は、1946年4月28日付『ウニタ』紙ミラノ版で、題名は「谷あいの夢:父から子へ」(*Sogni nella vallata: Di padre in figlio*)。その後、1947年3月23日付『ウニタ』紙トリノ版に掲載され、題名は「赤い牡牛」(*Il toro rosso*)に変更された。

カルヴィーノには、父と息子の関係を主題とする親子物ともいうべき作品群があるが、題名から明らかなように、「父から子へ」もまたその一篇である。しかしながら、他の親子物とはことなり、この短篇には、カルヴィーノと父マリオとの実際の関係の投影が希薄であるように思われる。たとえば、やはりこの短篇集に収められた「なまくら息子たち」と「地主の目」にはそれぞれ、一家の農地で作物を育てることに熱心な父と無関心な息子が対照的に描かれている。カルヴィーノの自伝的作品では、父子の関係が大きな重みをもっている。そこには、息子と父のあいだに存在した距離感が意識されるとともに、自然を知り尽くした父親マリオへの敬愛も感じられる。ところが、「父から子へ」には、農地に情熱を傾ける厳しい父親像は見られない。この短篇の主人公ナンニが父親にいだく主な感情は、敬意ではなく、むしろ軽蔑である。かつて堅信式(*cresima*)の日に、父親がつぎはぎだらけの服を着てナンニに付き添い、よその子に

からかわれた記憶が心の傷となっている。そしてナンニは思う。自分の子供たちの堅信式には、家族全員が服を新調して臨むことにしよう、と。何よりも、子供たちが、今の自分の目の奥にある憎しみの色を浮かべて自分を見ることがないように。この短篇においては、父から息子へ、またその子へと受け継がれてゆく、絶望的な生活の貧しさ、「石ころと藪だらけの畑で、何ひとつ栽培できないのに税金ばかり払わされる土地」、「ひよろ長く不格好な風貌」といった遺伝的特質が主題なのである。「血は争えないこと」をいやおうなくつきつける一家の物語だともいえよう。

短篇「父から子へ」は以下のように語り出される(引用はすべて関口英子訳)。

ここの村には、牛はほとんどいない。放牧に適した草原もなければ、鋤を曳かせて耕すほどの広い畑だってないのだから。あるものといえばただ、葉をかじることのできる灌木と狭い段々畑ぐらいで、地面は鋤をふりおろさなければ割れやしない。おまけに、役牛にしろ乳牛にしろ、あれだけ図体がでかくてのっそりとしているものだから、こんな狭くて切り立った谷間(たにあい)には不釣り合いだろう。ここの村には、痩せて筋だらけの、ごつごつした岩場を歩く獣がお似合いだ。ラバや山羊のような。

山裾の集落で飼われているのは(スカラッサ)のところの牛一頭きりだったが、こいつは不釣り合いということにはなかった。ラバよりも強力(ごうりき)でおとなしい、ずんぐりした逞しい小型の役牛だ。名前はモレットベッコ。(スカラッサ)の老父と息子が二人して、この牛を連れては、山裾一帯の小地主のために、麦の袋は粉挽き小屋へ、ヤシの葉は運送屋へ、堆肥の袋は農業組合へと荷物を運んで往復し、家族のために細々と生計を立てていた。

カルヴィーノの作品は、その長短を問わず、いずれも書き出しがみごとである。きわめて簡潔な一文「ここの村には、牛はほとんどいない」(*Pochi buoi, dalle nostre parti*)で始まるこの短篇も例外ではない。冒頭の二段落だけで、この土地の風土と動植物相が、そしてそこに住む人間と

の関係がくつきりと浮かび上がる。たとえば、役牛がヤシの葉を運搬するというくだりには、人間と家畜と作物の三者の関係がじつに端的に示唆されていないだろうか。スカラッサ(scarassa)とは、元来は「葡萄畑に並んでいる支柱」のことであり、父バットイステンと息子ナンニの、ひよろ長い不格好な風貌からつけられたあだ名なのである。物語の続きを読んでみよう。

その朝は、あたりに春が漂っていた。空気のかなかに、毎年、ある朝いきなり感じられる、ものがあふれ出る気配が感じられた。何か月も忘れていたことをふと思い出すような、あの感覚だ。普段はあんなにおとなしいモレットベッコまで、落ち着きを失っていた。朝、ナンニが牛小屋に行ったら、その姿が見えなかった。畑の真ん中にいて、うつろな眼つきであたりをさまよっていたのだ。歩き出してからも、モレットベッコはときどき立ち止まっては、輪のついた鼻を高々と掲げ、モーと短く鳴きながら、空気の匂いを嗅いでいた。ナンニは端綱をぐいと引き、あの、喉を鳴らすような、人間と牛のあいだで交わす言葉を掛けた。

モレットベッコはときどき考えごとに耽っているようだった。前の晩に、夢を見たのだ。そのせいで小屋を抜け出して、あの朝は、この世から隔絶された気分浸っていた。すっかり忘れていたことを、さも前世で経験したかのように夢を見た。草が豊かに生い繁るだっぴろい平原に、牝牛、また牝牛と、見渡すかぎり牝牛がいて、モーモー鳴きながら闊歩している。その真ん中に、あいつ自身の姿もあった。群れる牝牛のあいだでなにかを探すように駆けずりまわっていた。だが、なにかしらモレットベッコを押しとどめるものがあつた。肉に突き刺された赤いやつとこが邪魔して、牝牛の群れのなかを突っ切れずにいた。あの朝、荷を運びながら、モレットベッコはやつとこでできた赤い傷口が自分の内でまだに疼いているのを感じた。空気中にただよう、つかみどころのない絶望のように。

ナンニとモレットベッコが、「あの、喉を鳴らすような、人間と牛のあいだで交わす言葉」(una voce gutturale di quel linguaggio che s'usa tra gli

uomini e i buoi)でコミュニケーションをとっている点が注目される。なんのとさえもない貧しい農民のナンニだが、じつは彼も、家畜とともに生きる多くの農民がそうであるように、動物の言語を解する賢者なのではないだろうか。モレットベッコの夢の続きをたどろう。

モレットベッコは荒い息をついた。夢で見た光景を思い出したのだらう。記憶の外から立ち現れるように、跳ねまわる牝牛の群れが臉に浮かび、自分も牝牛たちのあとを追いかけてみたものの、どうにもしんどくてかなわない。小高い丘を登ったところで、牝牛の群れの中央に、傷の痛みとおなじく赤黒い、途方もなく大きな牝牛が現れる。鎌のような角を天に届かんばかりにふりかざし、唸り声をあげながらモレットベッコめがけて襲いかかってくる。

モレットベッコは、bue すなわち去勢牛であり、夢に現れて彼をおびやかす見るからに猛々しい赤黒い大きな牝牛は、去勢されていない牝牛 toro である。何の前ぶれもなく春が訪れた日、人だけではなく動物もまた、夢を見るのだろうか。だが、モレットベッコの見た夢は、おそらく、去勢される前の欲望と、去勢されたことのコМПレックスが具現化したものであり、フロイトの夢解釈によって人為的に組み立てられたかのような、あまりにも人間的な夢である。

モレットベッコは、人間に労役を提供することを条件に餌を与えられている生き物、つまり家畜である。この短篇には、深い絆で結ばれながらも非対照的な、人間と家畜の宿命的関係も示唆されているにちがいない。モレットベッコの見る夢がどこかほろ苦く、「空気中にただよう、つかみどころのない絶望のような」(come una disperazione ineffabile nell'aria)味がするのは、きっとそのためであろう。

(上智大学講師)

アカデミア留学記 ②

～新生活スタート編～

内田 好美

語学試験の結果は、学校のサイト上で発表された。

合格者リストに自分の名前を見つけると、ホッとため息が出た。一つ試験をクリアした安堵感と、残る試験への不安とが入り混じったものだった。

次はいよいよ面接。

「何を聞かれるのだろうか？」好きな作家について聞かれても語れるように、あらかじめ書き出し、まとめた。ポートフォリオに載せた作品については、アピールポイントを考え、作文し、イタリアの友人に添削してもらった。(ほとんど原型を留めない姿になって返って来た。)

そして、運命の日。

一次試験が行われた例の講堂前の広場に集められた。自分の作品であろうオブジェを抱えている者、油絵のキャンバスを剥き出しで運んでいる者、デッサンした紙の束を握っている者。(ポートフォリオではなかったか?!)

すると、担当官がコース名を呼んだ。受験者は担当官の下に集まり、そのうち「早いもの勝ち」で5人程が講堂の中へ通された。そうして、別のコース名が呼ばれる。受験者が通される。しばらくして、面接の終わった者達がちらほら出てくる。その繰り返し。ひたすら順番を待つ。そうすると、小雨が降って来た。構内に避難したいが、そのうち、自分のコースが呼ばれるのでは、と動けない。いつ順番が回ってくるのだろうか。

やっと、会場の中に入れた時は、もう昼前になっていた。会場内の所々にコースごとの面接コーナーがあるようで、面接官の先生方が5人程。面接官対受験者、5対1でしているコースもあれば、1対1の所もある。5対1は捌くのに時間がかかる。会場内でも、さらに順番を待たねばならない。面接コーナーの前に椅子が並べられ、順番待ちの

受験者が座っている。昼食に何を食べるか、という先生同士の話も聞こえてくる。

いよいよ自分の番が来て立ち上がり、緊張でガチガチになりながら面接官の前に進み出た。身分証としてパスポートを提示した。「ついに日本人が来た」と聞こえた。他に日本人はいないようだった。そして、ポートフォリオを彼らの前に広げる。一枚ずつゆっくりと繰られる。今迄の銅版画の経験は評価してもらえたようだった。

「すでに技術を学んでいるのですね。では何故ここに来たいの？」と彼らのひとりが尋ねると、「もっと色々経験したいんじゃないの」と別の誰かが答えた。誰かが質問すると、残りの面接官の誰かがそれに答えるのだった。こうして、ほとんど自分の口を閉じたまま、私の番は終わった。もちろん、好きな作家についても聞かれなかった。

自分が喋らなかったことに一抹の不安は残ったが、それでも歓迎されている印象を受け、「入学できそうだな」と思った。最初から最後まで予想を覆す入学試験だった。



【ボローニャ名物のポルティコ】

後日、例のごとくサイト上で自分の合格を知った。

けれども、通学初日まで安穩として日を過ごすわけには行かなかった。まだビザや入学の手続きが残っていた。

学校に通学許可証を発行してもらって、一旦帰国し、それを持ってビザの申請に行かなければならなかった。通学許可証をもらうためには、学校に必要な書類を提出し、学費も収めていなければならない。必要書類のうちには、イタリア滞在許可証とあるが、その滞在許可証の申請には、まずビザを発給してもらう必要がある。矛盾している。学校には、「滞在許可証は後日提出します」と連絡した。

苦労したのは学費の納入だった。まずアパート近くの銀行に行くと、想像以上の待ち時間。やっと自分の番が来たと思ったら、「ここで送金したことがあるのか、口座を持っているのか」等、色々聞かれ、嫌な予感がした。担当者は少し考えてから、「送金が可能か、向かいの窓口で聞いてください」と言った。その窓口に行くと、「ここはお金の相談窓口で、送金する窓口ではない」と、取り付く島もない。また、最初の窓口に並び直した。今度は先程とは別の担当者だったが、「ここでは取扱いできないので、送金先と同じ銀行の支店に行ってください」という結果に終わった。

そうして、銀行を調べてそこに向かうと、「口座は持っているのか、滞在許可証はあるのか」等、また質問。結局「送金できない」と。

私は何が問題なのかよくわからなかった。とにかく、学費を払わなければ。友人に情報を求め、やっと学生たちがいつも学費の納入に利用するポローニャの銀行に辿り着いたのだった。担当者は口座の有無を尋ねることもなく、慣れた手つきでコンピューターを操作、5分で送金が完了したのだった。

こうして、学費を支払い、通学許可証を得て帰国。慌ただしくビザを取得し、イタリアにとんぼ返りをした。

新生活はポローニャのチェントロ(中心街)のアパートからスタートした。戦時中に爆撃の被害を受けた地区で、中世の街並みが残っている他の地区に比べ建物が新しかった。公園が近くにあり、スーパーにも行きやすく便利な場所。

前月までこのアパートには日本人の女性が住んでいて、彼女が別の街に移り、替わりに私が入居することになっていた。

アパートの6階。フロアに着き、扉を開けると、ブル系の犬が廊下を走ってやって来た。話には聞いていたが、思っていたより大きくて驚いた。この住宅事情で大型犬を飼っているとは。。。同居人はイタリア人の女性、男性、そして彼の犬だった。

トイレ2ヶ所、バス、キッチン共用。広いリビングがあり、犬のおもちゃと、彼が運んで来たと思われる主人の靴が片方だけ転がっている。どの部屋にも光がよく射し込んでくる。テラスには数種類のハーブの植木。私の部屋はこれまでいた日本人女性のおかげで塵ひとつなく、家具や窓ガラスは磨かれ、床は拭かれていた。建物の中庭に面し、明るい部屋だった。

息つく間もなく新学期が始まった。

学校の場所はチェントロの北東、近くにはポローニャ大学の校舎や図書館が点在していた。ネプチューンの像(残念ながら修復中だった)のあるマッジョーレ広場を過ぎ、二つ並んだ塔の前を通り、ポルティコをぐり、校舎や印刷業者の並ぶ学生街(と私は呼んでいた)に入る。壁は余白を恐れるかのように落書きで埋めつくされ、若者たちが道や広場のそこかしこでおしゃべりを楽しんでいる。パールやピザ屋も学生で溢れ、賑わっている。この地区には独特の雰囲気があった。

あらためて学校を見ると、廊下には古典彫刻のレプリカが並び、生徒の作品が飾ってあり、いかにも芸術大学らしい。絵画コースの教室の前では油絵の具の匂いがし、彫刻の教室の扉が開かれると、石膏の粉が舞う。

授業の履修表を見て驚いた。今回の留学の目的であるペコラーロ先生の授業は三年次らしい。私はまだ入学したばかり！

挨拶だけでもと思い、先生がいらっしゃる教室に向かった。そこでは、生徒達が銅版画を制作していた。年配の男性が、それを見回っていた。ペコラーロ氏だとすぐにわかった。白髪混じりで、眼鏡をかけておられた。

私はご本人を前に緊張し、躊躇いがちに近寄り、

挨拶をした。「ボローニャに来て頂いて光栄です」と言ってくれました。思っていた通り、穏やかで優しいお人柄だった。授業の履修についても触れると、ここに来て制作していいですよ、という許可をいただくことができた！

私はそれ以来、空き時間にはその教室に行くことにした。

銅版画の教室(工房)にはプレス機が3台。そのうちの1台は、当校卒業生でもあるジョルジョ・モランディのもので、彼の妹から寄贈されたものだった。

刷る時はいつも順番待ち。プレス機が空けば、すぐに飛びつく。ハンドルを回すと、イタリアで制作する喜びが込み上げて来る。刷り上げた作品を確認する。紙についた取りきれないプレス機の汚れに気づき、がっかりする。仲間達の作品の面白さに見入る。乾かしていた作品に、誰かの指の跡を発見する…。混沌と喧騒と情熱に溢れる毎日。

デッサンの授業では、モデルさんが先生の指示通りにポーズを取り、それをスケッチブックに描く。早く描き上げなければ、次のポーズに移ってしまうのだが、私はモデルさんの長くほっそりした手足や、美しいカーブを描く腰に見惚れてしまう。

実技の授業はともかく、問題は講義だった。先生方は立て板に水、まあよくこんなに淀みなく喋れるものね、というくらい、資料を見ることもなしにすらすらと淀みなく話し続ける。3時間もあれば、途中で意識は別の方向へ行ってしまう。イタリア語の、しかも専門用語のシャワー。紙面びっしりとノートを取る学生達。自分も、と思うが、聞き取れない。何を書いているかわからない。私は講義を録音することにした。

このようにボローニャで必死にそして楽しく学ぶ日々が続いたが、その後、縁あってヴェネツィアに移ることになった。そのお話は、またあらためて書き記したい。

今、こうしてイタリアで学んでいるのは、恵まれているとしか言い様がない。もちろん、思う通りに行かなくて苦労することもあるが、それも自分のやりたいことをやっている証だ。

食べたものが身体を作るなら、経験したことも

同じだろう。私の経験が私を作る。なりたい自分になる為には、やりたいことをやればいい。それが未来に繋がっていく。

知らない場所に行ったり慣れないことを始めた時は、いつも勇気がいる。しかし、踏み出せば、それが経験となって、自分を作ってくれることは間違いない。楽しんでいる未来の自分の姿をイメージする、それが生きていく上で一番大切なことだと思う。

(当館元受講生)



【ボローニャ校の講堂にて】

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>